

チャンスが目の前にやってきても、気づけなかったり、追い払ってしまうことはないでしょうか。

生涯の伴侶を決める際に、慎重になるのは当然です。生活状態、日頃の素行、心の明るさに至るまで相手の情報を収集した上で、結婚に踏み切るのが通例ではないでしょうか。しかし、慎重になりすぎて、的確な判断ができなくなってしまう人もいます。

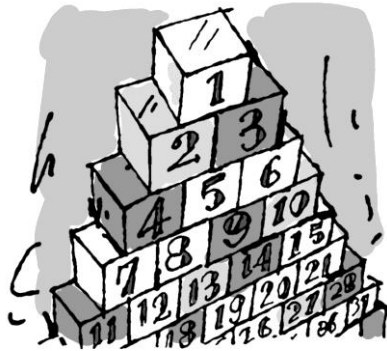
T子さんは五十歳を迎えようとしていました。これまで結婚の意思はありましたが、相性の合う人に出会っても親から反対されたりと思うようになかったのです。ある時、T子さんは周囲の人達に、「今年中に恋人を作つて、来年結婚する」と宣言をしました。「白馬に乗った素敵な王子様が、きつと迎えに来てくれる」と、おとぎ話のようなことを思い描いていたのです。

しかし、実現しそうにないことでも、言葉に出してみるものです。間もなく、T子さんに結婚の話が舞い込んできました。親しくしている近所の婦人からの紹介で、「見合い話がある」と家に呼ばれたのです。

願つてもいない話に心を躍らせていくと、相手の年齢は六十一歳で、妻を亡くした人でした。T子さんの理想は、四十五歳から五十五歳までの初婚の人でした。「今まで一人だったし、無理をして結婚することもないな」と、その場で断ろうと思いましたが、婦人の熱心さに負け、とりあえず会った後で、それを伝えることにしたのです。

5月のテーマ | 今日の外に人生はない

出会いの瞬間を捉えよ



T子さんは家に帰り、紹介された相手をインターネットで検索しました。すると、セミナーなどで活動している、スーツ姿の男性が映し出されました。

見た瞬間、頭の中は、さらに断りモード一色になりました。なぜならば、公言していた理想とは裏腹の、白馬どころか白髪で、王子様どころかお爺様だったからです。

〈絶対に断つてやる〉との思いで、待ち合わせの駅に佇みました。電車から降りたのは一人だけでした。改札口に来ると、その人がT子さんに向かって手を振ります。写真とは似ても似つかぬ人です。T子さんは自分の後ろに知り合いがいるのかと振り返りましたが、そこには壁しかありません。その人は、黒髪にカジュアル着姿の見合いの相手だったのです。その瞬間、〈この人は相当努力したんだな〉と感極まり、結婚条件が払拭されました。

その後、記念館を見学している時に、T子さんには「へもしかししたら、この人と結婚するかもしれない」と感じるものがありました。そして、レストランで昼食をとっている際に渡されたプレゼントに驚き、心がトキメキました。なぜならば、自分が欲しいと思いい、2週間前にノートに書き留めたブランドのネックレスだったからです。「いよいよ来た」と、実感したのです。

それから二カ月後に、二人は結婚をしました。断るつもりで会いに行ったものの、相手に運命を感じ、迎い入れる方向に心を転換したのはT子さん本人です。チャンスをつかむのか、それは自身の手中にあるのです。